

「世界史」大学入試問題の成立と展開に関する考察

—1950年前後の文部省による施策と授業への影響に焦点を当てて—

茨木 智志

はじめに

本稿の目的は、1949年4月から高校で実施された社会科「世界史」の大学入試問題がどのように成立し、展開したのかについて、1950年前後の文部省による大学入試に対する施策および大学入試による高校での授業への影響に焦点を当てて、その問題点を明らかにすることにある。

近年、歴史教育に対する検討が進められているが、社会科の中でも特に歴史は暗記科目として批判の対象となっている。大学入試に関わる制度的な変更や歴史用語精選などの検討が、教育行政的な施策検討から学術的な研究に至るまで幅広く取り組まれている。ただし、筆者はこれらの検討に対して、一点、危惧を抱いている。それは、歴史の大学入試を検討の対象としながら、歴史の大学入試がどのように始まったのかという歴史的な検討を全く欠いている点にある。これでは、後述するような当時の文部省の施策や大学の対応の謂わば〈失敗〉を繰り返すことになるだろう。これは、大学入試に関する一般的な研究が継続されてきた一方で¹、教科目の大学入試問題という個別の論題は学術研究の対象とはされてこなかったことが要因の一つである²。

そこで、本稿では、「世界史」の大学入試問題の成立とその後の展開を対象に検討を進める。具体的には、①「世界史」入試開始前から開始後数年の間における文部省による新制大学入試への施策、すなわち、いかなる理念の下でいかなる制度が用意され

¹ 大学入試制度に対しては、増田幸一他『入学試験制度史研究』（東洋館出版社、1961年）や日本教育学会入試制度研究委員会編『大学入試制度の教育学的研究』（東京大学出版会、1983年）など、いくつかのまとまった研究がある中で、特に、技術教育学の佐々木享氏が中等教育や高校からの観点で大学入試制度史を批判的に検討した、以下の一連の成果が参考になる。佐々木享「戦後日本の大学入試制度の歴史」（日本教育学会入試制度研究委員会編・前掲『大学入試制度の教育学的研究』）。佐々木享『大学入試制度』大月書店、1984年。佐々木享「大学入試の歴史（第1回）～（第47回）」（『大学進学研究』第7巻第1号～第16巻第4号、大学進学研究会、1985年5月～1994年11月）、など。ただし、佐々木氏は社会科を特に対象とはしていない。

² 近年では、世界史教育の検討の中で小川幸司氏が本稿の対象とする時期の「世界史」入試問題を取り上げて、現在までの「世界史」の課題を提示している（小川幸司「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」『歴史学研究』第859号、歴史学研究会、2009年10月）。一部を改めて、同『世界史との対話（上）』（地歴社、2011年）に所収。ただし、小川氏の指摘は制度としての考察には及んでいない。

て「世界史」を含めた大学入試が実施されたのかを中心に、②実際の「世界史」入試問題の動向、すなわち出題する大学側の対応、③社会科「世界史」の授業に取り組んでいた高校教師からの入試問題への批判等を取り上げた。おおよそ 1949 年から 1953 年前後までの時期である。これは新科目であった「世界史」の成立期にあたる。歴史教育史研究の観点からは、高校で取り組まれていた社会科「世界史」の授業実践に対して、謂わば〈圧力〉を加えてきた上記の②、そして社会科「世界史」の理想を説きつつ、ある意味で矛盾した施策を実行して②を助長した上記の①がいかなるものであったのかという検討でもある。

ここで、高校社会科の新科目「世界史」の当時の状況について、その概要を確認しておく。1945 年の敗戦の後、1946 年に新しい学校制度と教科課程（教育課程）の検討が進められた。この作業の中で 6・3・3 制に位置づいた新制高校の設置が決定した。また、新制高校の教科課程には小学校・中学校と同様に新たな教科である社会科が導入され、1 年次は「社会」（後に「一般社会」と呼ばれる）5 単位必修、2・3 年次は 4 つの選択科目から 1 科目 5 単位の履修ということが 1947 年に公表された³。このときの選択科目は「東洋史」「西洋史」であり、1947 年に「東洋史」「西洋史」の学習指導要領と一種検定本教科書が作成された（教科書は『西洋の歴史（1）』のみが発行された）⁴。

新制高校は旧制の中等学校を母体として 1948 年 4 月に発足し、引き続き「東洋史」「西洋史」の授業が行なわれていた。そのような中で、同年 10 月に教科課程の改正が通知され、翌 1949 年 4 月から「国史」（実施時には「日本史」と称した）「世界史」とすることが通達として連絡された⁵。これが「世界史」の始まりとなる。ただし、新科目「世界史」の設置は突然のことであり、実施を通知した文部省でもほとんど準備ができていなかった。文部省は 1949 年 4 月の実施時に高校社会科の歴史学習のあり方を説明した通達を出した⁶。この通達は社会科歴史の理念を示したものとして評価されている。しかし、非常に簡潔なものであり、具体的な授業の説明には及んでいなかった。そのため「世界史」は、教科書も学習指導要領もなく、世界史学という学問的背景もない中で、高校の教室において授業を実施しながら検討が進められることになる。そのような状況下でも、社会科学学習としての「世界史」授業の検討や、新たな歴史学習実現のための「世界史」教科書（準教科書）の検討が始められていった。

³ 「新制高等学校の教科課程に関する件」発学第 156 号、1947 年 4 月 7 日。

⁴ 『学習指導要領 東洋史編（試案）昭和二十二年度』著作兼発行者・文部省、翻刻発行者・中等学校教科書株式会社、1947 年 7 月。『西洋の歴史（1）』著作兼発行者・中等学校教科書株式会社、1947 年 8 月。『学習指導要領 西洋史編（試案）昭和二十二年度』著作兼発行者・文部省、翻刻発行者・中等学校教科書株式会社、1947 年 10 月。

⁵ 「新制高等学校教科課程の改正について」発学第 448 号、1948 年 10 月 11 日。

⁶ 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」発教第 247 号、1949 年 4 月 11 日。なお、この「11 日」という日付は、『文部時報』第 861 号（1949 年 6 月、44 頁）による。

文部省は、「世界史」実施開始1年目の1949年度では暫定的な措置を取りつつも、1950年3～4月には学習指導要領と検定教科書を届けるべく作業を始めてはいた。しかし、結果的には1952年3月になって「世界史」学習指導要領が発行され⁷、同年4月に「世界史」検定教科書の正式な使用が開始された⁸。すなわち、1年限りの暫定的であったはずの措置が3年間継続することになる。「世界史」の大学入試は、このような状況と並行して、以下のように進行していった。

1. 新制大学入試の始まりと「世界史」授業（1949年度入試）

1-1. 1949年度大学入試への文部省の施策

「世界史」授業が開始された1949年度は、新制大学が発足した年度でもあり、このときに新制大学の入学試験も開始された。文部省は新制大学入学者選抜に根本的な改革を意図しており、入学者選抜は、進学適性検査と教科に関する学力検査から成る筆答試験（後に学力検査と呼ばれる）、身体検査（後に健康診断と呼ばれる）、調査書を資料として判断されるものとされた⁹。教科に関する学力検査については、国語・社会・数学・理科・外国語の5教科を受験させることが望ましいとした¹⁰。文部省の指示に応じて、国公立大学の大部分は5教科を受験教科とし、私立大学では3教科前後を受験教科とすることが多かった¹¹。社会・数学・理科の3教科については、各教科のすべての科目を出題し、受験生は受験会場においてその中から1科目を選ぶ形式とすることが求められた¹²。これは高校の教育課程が、社会では「一般社会」に加えた1科目の履修を求め、数学・理科ではそれぞれ1科目の履修を求めていることに対応したものであった¹³。佐々木享氏が指摘するように、文部省は当初においては新制大学入試自体を「一つの教育」であることを原則とし、下級学校である高校の教育を尊重すべきことを非常に強調していた¹⁴。受験の教科・科目の設定もこの観点からなされた

⁷ 文部省『中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅲ (a)日本史(b)世界史 (試案) 昭和26年(1951)改訂版』明治図書出版、1952年3月。

⁸ 1952年4月から、文部省『昭和27年度使用 教科書目録 高等学校用』(1951年5月)に記載された5社5種8冊の「世界史」教科書の使用が始まる。それまでは授業用に発行された図書が準教科書として用いられた。「世界史」準教科書については、拙稿「準教科書に見る初期の世界史教育の模索—歴史教育史研究への準教科書の活用を事例として—」(『社会科教育論叢』第47号、全国社会科教育学会、2010年11月)等を参照されたい。

⁹ 文部省『昭和二十四年度新制大学(並びに専門学校等)入学者選抜方法の解説(一)』、13頁。記載内容から1948年10月頃の作成と判断した。

¹⁰ 同上、23頁。

¹¹ 佐々木享・前掲「戦後日本の大学入試制度の歴史」、46頁。

¹² 文部省・前掲『昭和二十四年度新制大学(並びに専門学校等)入学者選抜方法の解説(一)』、27～28頁。

¹³ 佐々木享・前掲「戦後日本の大学入試制度の歴史」、45～46頁。

¹⁴ 同上、40頁。

ものと見なされる。

1949 年度入試において、社会科を出題する場合は、次の各科目についてすべて出題し、そこから受験生が選択するものとされた（下線は引用者による）。

一般社会、東洋史、西洋史、人文地理、時事問題、国史¹⁵

「世界史」は 1949 年 4 月に授業が実施された新科目であるため、1949 年度新制大学入試の受験科目とはされておらず、1948 年度の高校社会科の選択科目であった「東洋史」「西洋史」が受験科目とされている。一方で「国史」が入っているのは、新制高校卒業予定者とともに新制大学受験を求められていた旧制高校 1 年修了者が履修した社会科に「対応する唯一のもの」であるためと説明されている¹⁶。また、教科における共通問題を含めて出題することを「最も理想的な方法」としていた¹⁷。

注目すべきは、文部省が提示した「出題の方針」である。学力検査の問題について、「学理的な適応性や創造的能力を検出することを主眼とする」こと、「単なる記憶や知識の集積に左右されるような末しょう的なものであつてはならない」こと、「教育目標に相応して教育的価値の高いものであること」、「選択問題（一つを選択すべき同一教科内の各科目の問題のこと：引用者注）の難易度の水準を一樣にすること」などを指示すると同時に¹⁸、問題作成に関して次のような要求を出した。

〔(イ) ～ (ハ) ・ (ヘ) 省略〕

(ニ) 採点の基準が単純で採点者の主観がはいらないような問題であること。

(ホ) 客観性を増すために各問題の形式をなるべく簡単にし、あらゆる角度から能力を検出するように、なるべく多数の問題を提出しなければならない¹⁹。

以上の全体的な「出題の方針」に加えて、各教科の学力検査に関して「出題方針と問題例」を別に作成して配布した²⁰。社会科の学力検査については、次のような諸点を提示した（下線は引用者による）。

¹⁵ 文部省・前掲『昭和二十四年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説（一）』、23 頁。なお、同書では「一般社会」、「解析Ⅰ」等を「教科」と呼んでいるが、混乱を避けるために本稿では「科目」と称した。

¹⁶ 同上、25 頁。

¹⁷ 同上、28 頁。

¹⁸ 同上、29 頁。なお、原文における傍点は、引用文中では上に付した。

¹⁹ 同上、29～30 頁。

²⁰ 文部省『昭和二十四年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説（二）—国語、社会、数学、理科学力検査の出題方針と問題例—』。前掲の本書の「(一)」が 1948 年 10 月頃作成と判断されるため、同様の時期のものと考えられる。

- 一、社会科…の学習が、有能な公民を育てるために、政治的・経済的・社会的・歴史的・地理的な人間関係における種々の問題を客観的・科学的に解決する能力を養うことを目的として行われる以上、社会の諸問題の建設的な解決に必要な知識・理解・技能などにわたって客観的なテストを行わなければならない。
- 二、教科書や参考書に与えられている知識の記憶の量のみをテストする問題は避けるように注意すべきである。
- 三、社会科の教育目標に照らして、テストの内容は一般社会人に必要な基本的な社会の問題…から取り、いたずらに細いことや特殊な専門的なことがらにわたらないようにすべきである。
- 四、問題を科目…別に出題する場合にも、問題の内容は従来のような狭い科目の分野にとどまらないように留意し、かつ各科目に共通の問題を用意して、すべての生徒に課すようにすることが望ましい。…
- 五、できるだけ客観的なテストを行うという目的のために、論文テストを避けて、組み合わせ法とか選択法というような、客観的に評価し得る形式を研究して採用すべきである。
- 六、テストすべき能力を次のように考えることは有効であろう。
 1. 重要な概念および原則の理解。
 2. データを正しく処理し、解釈する能力。
 3. 基本的な知識や原則を応用する能力。²¹

「社会の諸問題の建設的な解決に必要な知識・理解・技能などにわたって客観的なテストを行」うために、一方で、「知識の記憶の量のみをテストする問題は避けるように注意すべき」こと、「いたずらに細いことや特殊な専門的なことがらにわたらないようにすべき」ことを指示すると同時に、他方で、「論文テストを避けて、組み合わせ法とか選択法というような、客観的に評価し得る形式を研究して採用すべき」こと、などを指示している。特に大きな影響を持ったのは、「客観的なテスト」を実現するため、従来の「論文テスト」を避けて、「組み合わせ法」や「選択法」などの形式での問題作成を指示した点であった。戦前の試験一般は、基本的にいわゆる論述による試験であった。この「論文テスト」は、採点に採点者の主観が入ると批判されて、客観的に採点できる形式での学力検査が求められた。また、上記の「(ホ)」にあるように、「なるべく多くの問題」を出すようにも指示されている。文部省による「客観的なテスト」導入の背景には、占領軍の意向が反映していることが推測されるが、詳細は確認できていない²²。

²¹ 同上、18～19 頁。

²² 佐々木享「大学入試の歴史（第 15 回）新制大学入試はじまる（Ⅱ）」（『大学進学研究』第 53 号、1988 年 1 月、64 頁）では、1949 年度の最初の新制大学の学力検査における「客観主義」は、①「占領軍の示唆」があったからとされているが、充分に実証されていないこと、②1947 年度の（旧制）高

「問題例」としては、3 点の「テストすべき能力」を示し（上記の引用の「六」、それぞれ 3～9 問の「例」を挙げている。歴史に関しては、「東洋史」「西洋史」「国史」が提示された。以下のような問題例であった。

表 1：文部省により示された歴史の問題例（1949 年度入試用）

問題例	問題の内容
A 重要な概念および原則の理解	
例(3)〔国史〕 次の文の <input type="text"/> の中に、下記の中から最も適当と思われる語句を選んで入れよ。（一つの語句は、一箇所だけとは限らない。）	文は(イ)(ロ)の 2 つ。語句は 14 個。
B データを正しく処理し解釈する能力	
例(3)〔国史〕 次の a、b、 ^マ …の各項目の下に、関連ありと思われる語句を(Ⅰ)(Ⅱ)群より、それぞれ一つづつ記入せよ。	a～g の 7 項目。(Ⅰ)(Ⅱ)群に(イ)～(ト)の各 7 つの語句。
例(4)〔西洋史〕 次にあげた各項目中、イギリス・アメリカ合衆国・ロシア（あるいはソ連）の歴史にあてはまるものには○印、あてはまらぬものには×印をそれぞれの欄につけよ。	1～10 の 10 項目。
例(5)〔東洋史〕 清代史に関係ある次の文章の中、正しいものに○、誤りと思うものに×をつけよ。	一～五の 5 つの文。
例(6)〔東洋史、西洋史〕 次の地図は、ある時代のヨーロッパとアジアとアフリカに存在した大国を示すものである。空欄に必要な名称を記入せよ。 (フランク王国、イスラム帝国、東ローマ帝国、唐帝国の領域を示す地図を書き、フランク王国の名称のみを記入しおき、他の国名を記入すべき個所に <input type="text"/> をつける。)	
C 基本的な知識や原則を応用する能力	
例(2)〔西洋史〕 十九世紀のドイツ帝国は近代国家としては未成熟であったといわれるが未成熟の証拠として正しいものを次の文中よりえらび、○をつけよ。	一～十四の 14 の文。

注：文部省『昭和二十四年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説（二）—国語、社会、数学、理科 学力検査の出題方針と問題例—』（19～32 頁）により作成。

等学校・専門学校の入試で、すでに文部省から同様の方針が提示されていたこと、③さらには、敗戦前の 1945 年度の（旧制）高等学校・専門学校の入試でこのような形式が経験済みのものであったこと、を指摘している。

「テストすべき能力」を、「A 重要な概念および原則の理解」「B データを正しく処理し解釈する能力」「C 基本的な知識や原則を応用する能力」の3つに分けて、解答はすべて語句か記号、「○」「×」で答える問題のみが提示された。仮にも「テストすべき能力」を3つに分けて明示した点は、個々の試験問題がいかなる能力を測るものであるのかを、問題作成者に自覚させ、また、高校教師や受験生に意識させることにおいて、意味があったと評価できる。確かに「論文テスト」の採点に比べて、「客観的なテスト」の採点には、採点者の主観が入りにくい。もちろん「客観的なテスト」といっても、単なる暗記では解答できない問題の作成を求めている。ただし、いわゆる穴埋め問題や選択問題、正誤問題という形式が、歴史を含めた社会科の学力検査で大きな位置を占める端緒になったことも指摘できる。

1－2．1949 年度大学入試の実際

実際の1949年度の新制大学の学力検査における「東洋史」「西洋史」「国史」の試験問題を確認すると、「客観的なテスト」による設問が多くを占める結果となっている。例えば、次のような設問となっている。

表2：1949 年度大学入試における「東洋史」「西洋史」の出題形式の具体例

出題大学、科目、問題文	問題の内容
東京大学「東洋史」 ・第一問 次の文の空欄の中に如何なる語句を入れたら、最も適切であるか、番号の順に解答欄に記せ。 ・第二問 次のA群の各項にもっとも関係の深い項目一つをB群の中より選び、その番号をA群各項の右の括弧内に記せ。 ・第三問 宋時代に関係する下記の諸項について、正しいと思うものに○、誤と思うものに×を付けよ。 ・第四問 (イ) 次のA列とB列との事件または人物は、どちらが古く、どちらが新しいか。記号A、Bを用いて解答欄に年代の順序を示せ。(ロ) 次の事件は西暦何世紀に当るか。括弧内に数字を記入せよ。	・4つの文に10個の空欄。 ・A群は10の項目、B群は20の項目。 ・1～10の文。 ・(イ)はA列・B列に各5項目。(ロ)は6つの事件。
東京大学「西洋史」 ・第一問 下の文章の空欄に適當の語を当てはめ、番号に応じて解答欄に記せ。 ・第二問 下のAB二群各二十項目につき互に関係のあるものを組合せて、そのBの番号をAの右の括弧の中に記せ。 ・第三問 古代ギリシヤについて次の項目中正しいと思うものに○、誤と思うものに×を付けよ。 ・第四問 下記の書物が公にされたのは何世紀であるか。	・10個の空欄。 ・A群・B群に各20項目。 ・1～10の文。 ・10項目。

<p>一橋大学「東洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一 下の文章中の空欄に次の諸項目を書き入れよ。 ・二 次の諸項目の年代順を上部の（ ）の内に番号にて記入し、且つその下部の省名中、事件の経過に直接関係あるものがあれば、<input type="text"/>にて囲め。 	<ul style="list-style-type: none"> ・11の空欄に6つの語句。 ・中国近代史に関わる5つの出来事。各出来事に3つの省名を列挙。
<p>一橋大学「西洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一 次の左の事項・人物は各々どの世紀に生じ、活動したか。該当右の世紀欄に○印を記入して示せ。 ・二 十字軍運動が次の諸点でヨーロッパ社会に与えた影響につき、できるだけ簡潔にしるせ。 ・三 次の文中の空白を適当な言葉でみたとせ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・25の事項・人物。1～20世紀の20の空欄。 ・宗教上、政治上、経済上の3点。 ・17の空欄。
<p>東京工業大学「東洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1) 宋、唐、明、隋および中華民国の五つの国名の時代の特色づけるものを下の各項から選択せよ。 ・(2) 下記の文章中の<input type="text"/>内に適当する事項を次ぎのA項より選び、B項の文章を完成せよ。 ・(3) 次ぎの文章について、正しいものには○印を、誤りと思うものには×印をつけよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・建国年代5つ、民族3つ、主要事蹟7つから。 ・10の空欄に12の事項から選択。 ・5つの文。
<p>東京工業大学「西洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1) 次ぎの歴史上の事蹟に関連のある人物、その国籍および事蹟のあつた年代を記入せよ。 ・(2) 次ぎの文の<input type="text"/>の中に、下記の中から最も適当と思われる語（記号だけ）を選んで入れよ。 ・(3) 下記の五文章の成否を問う。（正しければ○印、正しくないならば×印をつけよ。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・5つの事蹟に、10の人物、8の国名、5の年代。 ・20の空欄に、11の語句から。 ・5つの文。
<p>お茶の水女子大学「東洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1) 次の文の<input type="text"/>の中に、下記の中から最も適当と思われる語句を選んで記入せよ。 ・(2) 次の1・2・3……の文を補うに最も適当な項目をそれぞれその下のイ・ロ・ハの中より選び、その下の（ ）内に×を入れよ。 ・(3) 東洋が世界史の近代的発展に遅れた理由として次の諸項目の中から重要なもの五項目を選び、その上の（ ）内に×を入れよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・20の空欄に、24の語句から。 ・10の文の空欄に、各3つの選択肢。 ・10の文から選択。
<p>お茶の水女子大学「西洋史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1) 次の文の<input type="text"/>の中に、下記の中から最も適当と思われる語句を選んで入れよ。 ・(2) 次のA群の著作の著者をB群の中より選び出し、これを年代順に列記せよ。 ・(3) 次の諸項目を産業革命の原因（産業革命の発生をうながした事情）と考えられるもの（A）とその結果（又は影響）と考えられ 	<ul style="list-style-type: none"> ・10の空欄に、23の語句から選択。 ・A群に10の著作、B群に10の著者。 ・10の項目。

るもの（B）に分け、それぞれの項目の上の（ ）内にA又はBを記入せよ。	
-------------------------------------	--

注：革新社編集部編『昭和24年度施行国立大学入学試験問題社会科篇』（革新社、1949年8月、1～35頁）により作成。大学名の表記を一部改めた。なお、東京大学と東京工業大学の社会科では、全員が解答すべき共通問題が別に存在する。

表に掲載した例はごく一部であるが、文部省が示した問題例の形式にほぼ沿ったものであることが確認できる。

受験生向けに、国公立大学34校の「東洋史」「西洋史」問題を使って「傾向と対策」を説明した吉岡力によれば、「今年は準備期間も短かく殆ど文部省の例題形式の模倣であつた」と断じている²³。そして、吉岡の分析では、「解説問題」の形式は「西洋史」163問中20問（12%）、「東洋史」157問中22問（14%）であった²⁴。吉岡の言う「解説問題」とは、受験生に文章で解説させる問題を広く指しているようであり、「解説問題」の中で「純粋な論文問題は極めて少ない²⁵」と説明している。つまり、およそ8～9割の「東洋史」「西洋史」問題は「客観的なテスト」の形式で出題されるようになった。これ以前の1947年度と1948年度の（旧制）高校・専門学校等の歴史の問題を見ると、いわゆる論述問題を基本として、一部に「客観的なテスト」が出題されている²⁶。その翌年に当たる1949年度での最初の新制大学の学力検査における変化の大きさが確認できる。

1－3. 「世界史」教師からの大学入試問題への批判

1949年度の国立大学の入試は、国立大学設置法の遅れ（1949年5月31日公布・施行）を理由に、1949年6月に実施されたものであった。1949年4月に始まった「世界史」の授業を行なう教師や授業を受ける高校生は、このような「東洋史」「西洋史」の学力検査に直面することになった。東京都立文京高校で「社会科世界史」の単元学習に取り組んでいた橘高信が、1949年7月の座談会において、出席していた大学の研究者に対して次のように指摘していたことは注目される（下線は引用者による）。

次に入学試験問題に関係することですが、入学試験問題が案外高等学校の世界史を成立させるかしないかに大きな影響があるということであります。高等学校の教師がどんなに世界史の教育的要請のあるところを掴んでやつておりましたも、新制大学に当然継続する高等学校でありますから、大学の諸先生の社会科世界史に対す

²³ 吉岡力『新制大学入試 世界史東洋史西洋史の傾向と対策 昭和25年度版』（旺文社、1949年11月、230頁）。なお、書名中の「東洋史西洋史」は原文では割書きされている。

²⁴ 同上、27頁。

²⁵ 同上、28頁。

²⁶ 旺文社編『昭和二十二年度 全国上級学校入学試験問題正解』（旺文社、1947年8月）、旺文社編『昭和23年度 全国上級学校入学試験問題正解』（旺文社、1948年6月）などを参照した。

る深い御理解がございませんと、せつかくの世界史もぶちこわしになってしまいます。 思つたまま申し上げて失礼かも知れませんが、先生方が昔並みの入試問題——形はなるほど新しいものに見えましても——を出しておられますと、生徒達の学習関心はどうしてもそちらに逸れざるを得ません。それでは世界史は外部からこわされることになってしまいます。現に今年の入学試験問題を見ましても、——もちろん立派な問題も沢山ございますが、生徒達から『いわゆる社会科的世界史』をやつていて大学に入れますか』といわれるような問題もまたそれ以上に多い。 また他県の先生方と世界史の在り方について話し合つた席上でも、「あなた方がやつておられるような仕方で、生徒達が果して入試問題を解答出来ますか」と聞かれるような問題は、よく吟味して考えますと、これは生徒の不勉強や、無知に帰せられる問題ではなく、むしろ問題の方が悪いと申してよいと思います。 すなわち大学の先生方が、高等学校に課されている社会科歴史の意味のあるところを御存知無い。否、無関心でいられる。 ^(ママ)それが。こんな結果を生むのではないかと思うのであります²⁷。

1949年4月以降、社会科による「世界史」授業を手探りで試みていた橘²⁸は、6月までの新制大学入試での「東洋史」「西洋史」の試験問題を見て、7月にこのように発言したものであった。橘の危惧は、社会科としての「世界史」授業と入試の試験問題との乖離が、始まったばかりの「世界史」の教育を「ぶちこわし」にしてしまうことにあった。その自覚を持つべきであることを歴史研究者に訴えている。

また、広島史学研究会の1949年12月発行の『月刊世界史研究』第2号に掲載されている「世界史座談会」でも「大学入試問題と世界史」が取り上げられている²⁹。ここでは、広島県内の高校で「世界史」を担当している教師が1949年度大学入試後の「世界史」授業をめぐる状況を述べている。次のような発言がある。

世界史の学習に入試がわざわざしている点が多い。(広島高等師範学校附属高校・高橋千之助)

特に三年生は試験目当の勉強をやらざるを得ない。世界史を軌道にのせようと努力しても、現実的な問題に邪魔されて、どうもできない。(国泰寺高校・松浦道一)
文部省のやり方は世界史の発展にブレーキをかけている。(広島女学院・永田恭子)

²⁷ 「討論 世界史の基本問題」尾鍋輝彦編『世界史の可能性—理論と教育—』東京大学協同組合出版部、1950年3月、134～135頁。

²⁸ 橘高信「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」尾鍋輝彦編・前掲『世界史の可能性—理論と教育—』。これは1949年度における橘の授業実践をもとに執筆されたものである。橘のこの論文と座談会での発言は、拙稿「橘高信著「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」—高校からの「社会科世界史」の主張—」(『歴史教育史研究』第9号、2011年12月)に解説を付けて再録されている。また、関連して、「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 橘高信先生」(『歴史教育史研究』第10号、2012年12月)に、当時についての橘の回想が収録されている。

²⁹ 「世界史座談会」『月刊世界史研究』第2号、広島史学研究会、柳原書店、1949年12月、3～4頁。

どうしてあんな入試規定をだしたのか、その理由は文部省に尋ねてもはつきりしない。文部省のコース・オブ・スタディーもできていないのだから、文部省の責任のがれだとも云いうる。全くの無責任だ。(広島高等師範学校附属高校・上野実義)

今の入試方法によると、昔のような入試準備が有効なのではないでしょうか。昨年度の入試問題を見ると、単元学習では不利だという感が深い。…〔試験勉強は：引用者注〕固有名詞や年代を暗記していないと解答できません…(国泰寺高校・坪井守麿)

昔のような試験勉強をなくさせる目的をもった筈のものが却って助長するようですね。…年表か問題集を暗記するのが最もよい勉強方法となる。(広島高等師範学校附属高校・大久保光)

新制高校の学習効果を大学が正しくうけ入れなければ、昔のような上級学校受験のための勉強はなくなならない。(広島高等師範学校附属高校・定宗一宏)

あんな問題を出されると、生徒は単元学習に身を入れない。(基町高校・森田雅一)

30

広島史学研究会は、単元学習による社会科の「世界史」教科書作成に着手していた³¹。ここには、始められたばかりの「世界史」授業に及ぼした 1949 年度大学入試による悪影響の状況が述べられている。文部省が示した社会科教育の理念と大学入学選抜の実際が矛盾する形で、入試問題に顕在化していた。その矛盾の現実直面した教師そして生徒の様子が表現されている。

以上のように、次年度の大学入試における「世界史」の試験問題を予想させる「東洋史」「西洋史」(さらには「国史」)の試験問題が、社会科による「世界史」授業を動揺させていた様子が確認できる³²。

2. 入試科目としての「世界史」の出題開始とその性格 (1950 年度入試)

2-1. 「論文テスト」と「客観的なテスト」

ここで、歴史における「論文テスト」と「客観的なテスト」について確認しておく

³⁰ 同上、3 頁。

³¹ その後、広島史学研究会は 1950 年に「世界史」教科書(準教科書)を発行する(広島史学研究会編、責任編集・杉本直治郎・千代田謙・上野実義『世界史研究』柳原書店、上巻〔1950 年 3 月 5 日発行〕、下巻〔1950 年 8 月 25 日発行〕)。

³² 1949 年度入試の「国史」の問題に関しても、歴史教育への悪影響の指摘がなされていた。日本歴史学会の「新制大学高等学校入学試験における歴史科の問題を繞りて一座談会一」において、発言者「A」(東京都立文京高校の菅野二郎と推測される)は、「…中学校にしても高等学校にしても、歴史教育というもの成功するかどうかということは、入学試験にかかっています。生徒達は新しい歴史教育の方がいいという事を承知しておつても、大学側が旧態依然たるものがあれば、それじゃあ私達うかりますか、という」と問題点を指摘していた(『日本歴史』第 22 号、1950 年 1 月、49 頁)。

たい。文部省は、大学入試選抜の社会科の学力検査では「論文テストを避け³³」ることを求めた。「論文テスト」は戦前に一般的な試験法であり、(旧制) 高校や専門学校の入学試験を含めて歴史の試験はこの方法での解答が基本であった。文部省は「論文テスト」を排除しようとした意図を、「論文テスト」の採点が客観的なものでなく採点者の主観で行なわれやすいためと説明していた。しかし、戦前の「論文テスト」の問題点は、採点の主観性のみではなく、出題方法が暗記した知識の再生を基本としていた点にあったと考えられる。以下は、戦前の歴史の入試問題の例である。

1922 年度官立高等学校

- 歴史 (一) ローマノ文明ニツキテ記セ
(二) 左ノ各項ニツキテ記セ
(イ) モンロー主義 (Monroe Doctrine) (ロ) マジェラン (Magellan)
(ハ) ミラボー (Mirabeau)

1922 年度東京高等師範学校〔日本史、西洋史は省略〕

- 歴史 東洋史 (一) 宋金両国の関係を記セ
(二) 莫臥^{ムガル}兒帝国の興隆につきて記セ
(三) 左の名称につきて知る所を記セ
(イ) 六芸 (ロ) 鄭夢周

1923 年度官立高等学校

- 歴史 一、十字軍ノ影響ヲ記セ
二、神聖同盟ノ成立ヨリ瓦解ニ至ルマデノ次第ヲ略述セヨ

1923 年度東京高等師範学校〔日本史、東洋史は省略〕

- 歴史 西洋史 一、百年戦争がイギリス、フランス両国に与へたる影響を略説すべし。
二、左の人人の事蹟を記セ。
(イ) ユスチニアヌス Justinianus. (ロ) メツテルニヒ Metternich.
三、左の地に関する事蹟を記セ。
(イ) サラトガ Saratoga. (ロ) ヴイラフランカ Villafranca.³⁴

³³ 文部省・前掲『昭和二十四年度新制大学(並びに専門学校等)入学者選抜方法の解説(一)』、18頁。

³⁴ 中等教育会編『大正11. 12. 13. 14. 15年度 最近五ヶ年間官立学校入試問題答案集』中等教育学院、1926年、「大正十一年度」7～8頁、14頁、「大正十二年度」9頁、14頁。なお、引用文中のルビは原文のままである。当時の官立高校は、共通の学科試験問題を用いて各校ごとに選抜をしていた(佐々木享・前掲『大学入試制度』、34頁)。

これらの出題例では、特定の項目についての記述が求められている。一つは、「モンロー主義」「マジェラン」「サラトガ」などの人物、地名、事項などの項目であり、もう一つは、歴史的な出来事に関わる「関係」「影響」「次第」などの項目である。ただし、問題答案集の編集者による「答案」例を見ると、基本的には、どちらも教科書の記載さらには参考書などで一定の情報を付け加えた記載を解答することが求められている。つまり、戦前の「論文テスト」の基本は、これまでの学習をもとに思考して解答することではなく、そのときに暗記しておいた答えを問いに応じて再生して記載することにあった。このような解答方法の形式からも問題数はあまり多くないのが通常であった。

このような形式の入試問題を改革すべきであるという文部省の方針は評価できる。ただし、「論文テスト」の出題方法と採点方法の検討を促すのではなく、「論文テスト」での出題を避けて、「客観的なテスト」での出題を求めるという形式面の改革を進める方向を採用した。

2-2. 1950 年度大学入試への文部省の施策

文部省は前年度と同様に、1950 年度大学入試に向けて『昭和二十五年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』という冊子を配布した³⁵。1949 年 10～11 月頃に作成された本冊子で、大学入試全般の基本は前年度と同じながら、学力検査における社会の科目については、次のように「世界史」が初めて登場した（下線は引用者による）。

一般社会、日本史、世界史、人文地理、時事問題、東洋史、西洋史³⁶

このように 1949 年 4 月に授業が開始された「日本史」「世界史」が、大学入試の社会科の科目とされた。同時に「東洋史」「西洋史」が受験科目として残されている³⁷。そのため 1950 年度大学入試では「世界史」「東洋史」「西洋史」が受験科目として並ぶこととなった。「東洋史」「西洋史」は 1951 年度大学入試でも受験科目とされて³⁸、1952

³⁵ 文部省『昭和二十五年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』。1949 年 10 月に出された通達および 11 月の予定について言及があることから、10～11 月頃に作成されたものと判断した。そして、1950 年 1 月～6 月の刊行物を対象とした『文部省刊行物目録』第 2 集に記載されていることから、発行は 1950 年 1 月頃と判断した。なお、同目録では、大学学術局大学課編とされている（文部省初等中等教育局教科書管理課『文部省刊行物目録総覧』、1981 年 1 月、6 頁）。

³⁶ 文部省・前掲『昭和二十五年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』、22 頁。

³⁷ ここでは特に説明がなされていないが、1948 年度に「東洋史」「西洋史」を履修した新制高校の卒業生、特に全日制課程ではない新制高校の卒業生を念頭に置いての措置であった。

³⁸ 「昭和二十六年度新制大学、短期大学及び旧制専門学校への入学者選抜要項及び進学適性検査実施要項について」、文大大第 761 号、1950 年 8 月 16 日（文部省大臣官房総務課『昭和二十六年三月 文

年度大学入試でようやく消えることとなる³⁹。ただし、1950 年度大学入試では社会科を受験教科としたほとんどの大学が「世界史」「東洋史」「西洋史」を出題したようであるが、1951 年度大学入試での「東洋史」「西洋史」の出題状況ははっきりしない⁴⁰。

そして、文部省はこの冊子の中で、「日本史」「世界史」の「社会科歴史の学力テスト」について解説や例題を示した。社会科の他の科目については前年度の解説で方針を説明しており、その上で、文部省として、特に全く新たな「世界史」について、その大学入試問題のあり方を示す必要があったと見なされる。1949 年 4 月から始められた「世界史」は、何もない中で内容や授業方法をめぐって高校では試行錯誤が継続していた。その一種の混乱は、1949 年度末に 1950 年度入試用の「世界史」入試問題を初めて作成しなければならない大学側にとっても同様であった。しかも、1949 年度大学入試の社会科の入試問題は、新たな大学入学者選抜を推進していた文部省にとっても、入試問題を作成して選抜を実施する大学にとっても、授業を実施する高校の教師にとっても、大学入学者選抜を受ける受験生にとっても、不満や不安のあるものであったと考えられる。

このときに示された「社会科歴史の学力テストについて」は、次のような内容のものであった。まず、「日本史」「世界史」は学習指導要領が発行されていないため、1949 年 4 月の通達「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」で示した社会科歴史学習の目標（(イ)から(リ)の 9 か条）を再録して、問題作成に当たってはこれを考慮すべきことを指示している⁴¹。そして、「昭和二十四年度〔1949 年度：引用者注〕実施の学力テストの結果にかんがみ」として特に留意すべき 7 点を列挙した。以下の通りである。

部行政資料 終戦教育事務処理提要第五集』、1951 年 3 月、507 頁〔国書刊行会、1997 年復刻〕。なお、この通達では「東洋史」「西洋史」のみで「世界史」が列挙されていないが、その後に発行されたと考えられる文部省『昭和二十六年度新制大学短期大学専門学校等入学者選抜方法の解説』（26 頁）では、「世界史」「東洋史」「西洋史」となっているため、誤植であると推測される。また、後述する文部省『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』（40 頁）では、1951 年度入試での東洋史・西洋史のテストは「夜間高等学校卒業業者等のための本年限りの全く臨時的処置」と説明している。

³⁹ 「昭和二十七年新制大学、短期大学及び旧制専門学校等への入学者選抜実施要項並びに進学適性検査要項について」、文大第 535 号、1951 年 7 月 4 日（近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 26 巻、講談社、1958 年、332 頁）。

⁴⁰ 『全国新制大学 入試全科正解 昭和 25 年度』（〔蛭雪時代臨時増刊号〕、旺文社、1950 年 5 月）および旺文社編『全国大学入試問題正解 昭和 26 年度』（旺文社、1951 年 4 月）を参照した。なお、1950 年度の入試問題をもとにして次年度の「傾向と対策」を執筆した吉岡力が、1950 年 8 月に「世界史」と「西洋史」「東洋史」を別々に発行しているのが興味深い（吉岡力『新制大学入試 世界史の傾向と対策 昭和 26 年度版』旺文社、1950 年 8 月。吉岡力『新制大学入試 西洋史東洋史の傾向と対策 昭和 26 年度版』旺文社、1950 年 8 月）。「東洋史」「西洋史」の受験生からの要望があったと考えられる。

⁴¹ 文部省・前掲『昭和二十五年新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』、39～40 頁。なお、通達と対照すると、「理解させること」が「理解すること」に、「いだしめること」が「いだけさせること」に直され、句読点の削除がなされているなどの一部修正が施されている。

1. 中学校高等学校の歴史は従来の歴史科でなく社会科という一教科中の科目であること
2. 従つて社会科及び社会科歴史の学習目標を十分検討せられその目標についてテストせられたく教材そのもののテストに陥らぬよう留意せられたきこと
3. 単に史実記憶の量をテストするが如き問題をさけ、歴史事実でなく歴史的思考力のテストに重点をおかれたきこと
4. 生徒の使用する教科書の内容は決してそのまま生徒の学習内容ではないこと、教科書は生徒の問題解決のため各自必要に応じとり上げる性格のものであることを考慮せられたきこと
5. 社会科の目標が現在社会生活の理解である点より特に近代史に重点をおかれたきこと
6. テストの問題は昨年同様次の三項目について実施せられたきこと
 - (1) 重要な概念及原則の理解
 - (2) データを正しく処理し解決する能力
 - (3) 基本的知識及原則を現在社会の問題に応用する能力
7. 其の他は出題の一般方針によること⁴²

ここでは、歴史は歴史科ではなく社会科の学習であり、その目標に応じた「歴史的思考力」のテストを求め、これまでの教科書の内容を基本とした「史実記憶の量」のテストを排している。同時に、近代史の重視や前年度に指示したのと同様のテスト形式での実施を求めている。歴史学習に関しては、ある意味で初めて大学側に社会科教育を求めたものであった。

加えて、「世界史学習上の重要概念（試案）」を「学力テスト出題の参考」として掲げた。以下のようなものであった。

世界史学習上の重要概念（試案）

人類の発生、原始社会の本質、文明の発生、国家の成立、交易と文化の交流、古代ギリシヤの民主政治、ローマ帝国の歴史的意義、古典文明の性格、世界的宗教の役割、ヨーロッパの封建社会の本質、市民階級の抬頭と国民国家の成立、ルネサンス、宗教改革、地理上の発見、絶対君主制、資本主義、近代科学の発展、イギリス革命、アメリカ独立革命、フランス革命、産業革命、デモクラシー、ナショナリズム、西洋のアジア進出、明治維新＊アジア社会発展の特殊性、アジアの専制国家とその文化の特質、社会主義、帝国主義、日本の大陸政策、ロシア革命、中国革命、

⁴² 同上、40～41 頁。

第一次世界大戦とその後の国際協調、全体主義と世界恐慌、第二次世界大戦、世界平和運動、アジアの民族運動、現代日本の世界史的地位。

＊アジア社会発展の特殊性（土地所有関係の特質、村落の封鎖性、迷信習慣の根強さ、科学技術と生産方法の発達との結合が不十分なこと、行政都市、商業都市、
 宦人支配、東洋的専制主義、農民叛乱、遊牧民の侵入、王朝の交替、人民生活の
 向上）⁴³

まず、この「世界史学習上の重要概念（試案）」の最大の問題点は、実際に「世界史」授業をしている高校ではなくて、大学に「学力テスト出題の参考」として提示していることである。高校に社会科としての「世界史」授業を求めながら、具体的なものが全く示されていない段階で、「学力テスト出題の参考」が高校を飛び越して大学に提示されてしまったのが、「世界史」であった⁴⁴。

内容としては、西洋の近代を極度に重視した「重要概念」になっており、西洋の文明の発展と東洋の特殊性を学ぶ、非常に西洋史に偏った「世界史」を示している。なかでも、「アジア社会発展の特殊性」については、特に「＊」を付けて、注記のような形で詳細を説明している。西洋史に、わずかな東洋史の内容を挟み込んだような「世界史」が、大学の歴史研究者を中心としたであろう「世界史」入試問題作成者に、文部省から提示されている。「（試案）」としながらも、これが「世界史」の入試問題作成の参考のための「重要概念」として提示された。

そして、「単なる一例」と添えつつ、次のような「例題」が示された。

表3：文部省により示された歴史の問題例（1950年度入試用）

問題例	問題例の内容
一、次の文章の□の中 ⁴⁵ に左記の語句中より最も適当なものを挿入せよ。（歴史発展及時代概念の理解）	ヨーロッパ中世封建社会の崩壊に関する文章。「語句」は13項目。空欄は14か所。
二、世界史における日本の近代化の過程において普遍的なものと特殊なもの ⁴⁶ とを三項目ずつあげよ。（歴史発展の普遍性と特殊性の理解）	
三、次の日本史に関係ある文章を年代的に配列 ⁴⁷ せよ。（歴史発展の理解）	農業、土地、身分、租税などに関わる(1)～(6)の6つの短文。

⁴³ 同上、41～42頁。

⁴⁴ この「世界史学習上の重要概念（試案）」（1950年1月頃）は、1950年9月の「世界史」学習指導要領の中間発表の中で一部の文言が改められて「参考 世界史学習上における重要事項」として掲載されることになる（「高等学校社会科世界史の学習について」文初中第495号、1950年9月22日）。なお、作成者ははっきりしないが、1949年度から「世界史」学習指導要領の編集委員会が始まっていたことを考慮すると、この委員会で検討されたものとの推測が成り立つ。

四、次の円グラフは日本の封建社会末期の全国の土地領有問題を示したものである。下の欄に適当な名称（……領）を記入せよ。（重要概念の理解）	72.5%のA、25.8%のB、1.2%のC、0.5%のDから成る円グラフ。
---	--

注：文部省『昭和二十五年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』（43～45 頁）により作成。

「東洋史」「西洋史」「国史」を対象とした前年度の方針を基本的に踏襲している。テストで測るべき能力として「歴史発展」を前面に出したことは、前年度で示した「原則」（の理解）を「日本史」「世界史」に当てはめた形となっている。前年度の入試問題の実際を踏まえて、記憶だけでなく思考により解答する問題作成をより一層強く求めている。問題の形式としては、前年度で示した、「○」か、「×」かで解答する設問がなくなっている。これは偶然性に左右されるとして批判されていた。また、記号や語句での解答を原則としていた前年度の例と異なる、上記の「二」のような設問が提示されている。この例題は、文部省が「論文テスト」を一定程度において容認する方向を示したものとも受け止められたようである⁴⁵。ただし、基本的には「世界史」の入試は、その最初から「客観的なテスト」による問題が求められた。

2－3．1950 年度大学入試での「世界史」の実際

1950 年度入試での初の「世界史」問題は次のようなものとなった。まず、具体的な問題の例を挙げる。

表 4：1950 年度大学入試における「世界史」の出題形式の例

出題大学（学部）、問題文	問題の内容
<p>東京大学 「世界史」</p> <p>【1】 下に記した項目のうちから、次の文章の空白を埋めるのに適したものを選び、その番号を解答欄に記入せよ。</p> <p>【2】 次の文章の中の空白の箇所に最も適当な語句をあてはめ、答を解答欄に記入せよ。</p> <p>【3】 次の十項目のおのおのにつき、正しいものには○、誤れるものには×をつけよ。</p> <p>【4】 下に示した項目のうちから、次の文章の空白を埋めるのに適したものを選び、その記号を解答欄に記入せよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東西文化交流に関する文章。a～t の 20 の空欄。1～30 の選択肢。 ・世界史上の諸言語に関する文章。a～j の 10 の空欄。 ・世界史上の交流・影響に関わる (1)～(10) の短文。 ・西洋諸国の進出と日本・中国に関する文章。a～t の 20 の空欄。1～30 の選択肢。

⁴⁵ 吉岡力・前掲『新制大学入試 世界史の傾向と対策 昭和 26 年度版』、17 頁。

<p>東京教育大学 「世界史」</p> <p>【1】 下記のうち、インド＝ヨーロッパ民族に属するものに○印をつけ、その中で、更に①インド②イラン③スラヴ④ゲルマン⑤ローマンス（ラテン）⑥ケルト群に属するものには、○の中に上記の番号を記入せよ。</p> <p>【2】 次の文章で、三つずつ並記されたことばのうち、正しいものに○印をつけよ。</p> <p>【3】 次の文章の□の中に、適当なことばを記入せよ。</p> <p>【4】 英国産業革命の進行と、英国東インド会社及びアヘン戦争との相互関係を述べよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「アルメニア人」以下、16 の項目。 ・東西の交易に関わる文章。10 か所に3つずつの言葉。 ・中国における列強の動向の文章。5つの空欄。
<p>慶応義塾大学 「世界史」</p> <p>【1】 次の（ ）の中から不適当な名辞を消しなさい。</p> <p>【2】 次の人々に最も関係の深い事柄を選んで、その番号を人名の右の（ ）に入れなさい。</p> <p>【3】 適当な句の上の数字を○で囲みなさい。</p> <p>【4】 次の言葉の中、三つを選び、その下に一行ずつ説明しなさい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・西洋古代史に関わる a～c の3つの短文に2～3の語句。 ・西洋史に関わる a～g の7つの人名。(1) ～ (13) の語句。 ・西洋史に関わる a～c の3つの文の続きを、1～3から選ぶ。 ・「テニスコートの誓」などの5つの語句。
<p>早稲田大学 第一法学部 「世界史」</p> <p>【1】 次の文章中の□に適当な語句を書き入れよ。</p> <p>【2】 次の語句のうち、次表左欄の項目と関連の深いもの三つずつを一組として、表中の空欄に配置せよ。</p> <p>【3】 次の文章中にそれぞれ一群をなしている人名、地名、件名、年号のうち最も適当なものに傍線を引け。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中世のアラビア、イギリスの東洋進出に関わる2つの文章に10個の空欄 ・20の項目。表は「希臘正教」など5項目に各3つの空欄がある。 ・19世紀以降の欧米に関する(イ)～(ハ)の文章中の10か所に、3～5の語句が記載。

注：『全国新制大学 入試全科正解 昭和25年度』（〔蛭雪時代臨時増刊号〕、旺文社、1950年5月）により作成。なお、東京大学と東京教育大学の社会科では、全員が解答すべき共通問題が別に存在する。

初めての「世界史」入試問題は、「客観的なテスト」を求められる中で上記の表のような語句等の選択、空欄の穴埋め、正誤の記載を中心に出題された。「世界史」という教育において大学から求められる学力はこのような問題で試験されることが、「世界史」の教師と高校生に示されたことを意味している。基本的に前年度の「東洋史」「西洋史」での出題の形式を踏襲することが求められ、実際に踏襲されている。ただ、上記の表

にも記載したように、「論文テスト」の形式での出題も一部で併用されていた。1950年度の「世界史」入試問題の傾向を受験生に説明した吉岡力によれば、「純粹の論文テストは大体前年度と同程度の出題数である」けれども、「新形式問題」（「客観的なテスト」）の「欠点」を補う意図で「文章による解説」を求める「新形式問題と論文テストを複合した問題」が目立ってきたことに注意を促している⁴⁶。

東京都立立川高校の友野正雄は、「論文体テスト」は「問題解決方法や批判能力等をテストする」のに適しており、「客観的テスト」にも短所があるため、「歴史の問題は、客観的テストと論文体テストを併用して作製さるべきであろう」と指摘した（1950年7月発行）⁴⁷。1950年度大学入試における最初の「世界史」の問題を見ての指摘であり、批判であった。

1950年度入試における「世界史」の問題は、そのほとんどを「客観的なテスト」が占め、一部に「論文テスト」を交えた形式で出題された。「客観的なテスト」が問題の基本に据えられたことは、文部省の意図通りであった。しかし、「客観的なテスト」の形式のもとで、受験生が学んできた社会科歴史の学習目標をテストするのではなく、受験生が記憶してきた事項をテストする傾向が露骨にあらわれていた。これは、高校で取り組まれていた社会科歴史を推進すべき文部省の立場からは大きな問題であった。

3. 「世界史」入試問題の改善の試みと実際（1951年度以降）

3-1. 1951年度大学入試に向けての文部省の施策

1951年度入試に向けて、「世界史」との関わりで言うと、文部省は2つの施策を行なっている。第一に、社会科（数学、理科を含む）を出題する場合、社会科の科目すべての中から1科目を受験生が自由に選択していたのを、2科目選択させてもよいとした⁴⁸。佐々木享氏によれば、2科目選択の許容は大学側からの要望に一部応じた結果であった⁴⁹。大学側は受験科目の指定を望んでいたが、それは新制高校教育課程の原

⁴⁶ 同上、16頁。

⁴⁷ 友野正雄「世界史学習評価の問題作製法」『高校教育』第3巻第7号、実教出版、1950年7月、35頁。

⁴⁸ 文部省『昭和二十六年度 新制大学短期大学専門学校等 入学者選抜方法の解説』、22頁。1950年7月～12月の刊行物を対象とした『文部省刊行物目録』第3集に記載されていることと、記載内容から、この解説は1950年10月頃に作成され、年内に発行されたものと判断した。なお、同目録では、大学学術局大学課編とされている（文部省初等中等教育局教科書管理課・前掲『文部省刊行物目録総覧』、7頁）。

⁴⁹ 佐々木享「大学入試の歴史（第20回） 学力検査科目をめぐる確執（3）」『大学進学研究』第10巻第5号、1989年1月、64頁。佐々木氏は、この2科目選択の持つ問題点を高校教育の観点から指摘している。

則から外れるものであった⁵⁰。

第二に、「世界史」を含めたすべての教科・科目について『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』を発行した⁵¹。これは「各大学で出題される問題は必ずしも適切なものばかりとは云い難い現状に鑑み」て、すでに実施された1950年度入試の問題に対して、文部省内に大学・高校の「諸先生」による「協議会」を設けて作成したものであった（「序」）。「まえがき」では、問題出題に際しての「一般的注意事項」が列挙されている。まず、これまで同様に、①「各教科の教育目標を十分に研究し、…各教科指導の望ましい方向に沿うような問題を選定」すること、②「教科書の持つ意味は過去のそれとは著しく違っている」ので、「教科書を主体として出題すること」がないようにすること、③科目間の問題の難易を平均する努力をすることを述べている⁵²。そして、これまでの方針を若干修正した以下の数点を示した。

〔1～3を省略〕

4. すべての問題を強いて客観的テストだけに限る必要はないが、客観的テストの特色および長所を研究して、これを十分に活用すること。客観的テスト作製の困難性をもつて、過去の試験問題の形式に帰ることがないように注意しなければならない。
5. 論文体テストを混える場合には、慎重に研究し、問題の中心点がよくつかめ、また採点者の主観によつて著しく左右されないようなものにすること。
6. ある教科中に共通な問題を課す場合には、高等学校在学中にその教科に含まれるある科目を選択した生徒にだけ有利、あるいは不利なことがないように慎重を期すること⁵³。

ここでは、「客観的テストの特色および長所」を活用すべきこと、すなわち「客観的テスト」の形式に限る必要のないことを提示し、同時に、「論文体テスト」への慎重な

⁵⁰ 大学による受験科目指定は、後には一般化して今日に至っている。佐々木享氏によれば、1960年改訂の高校学習指導要領による教育課程の構造が背景になって、1966年度入試から文部省は受験科目の指定制を公認したという（佐々木享「大学入試の歴史（25回） 大学入試における科目指定制の公認」『大学進学研究』第11巻第4号、1989年11月）。関連して、国立大学協会は1952年2月に『昭和二十七年二月 高等学校における履修科目選択に関する参考資料 国立大学協会』（1952年7月）という冊子を発行して、各「専攻学」からの高校での履修科目の希望を提示した。新制高校での制度に対応できていなかった新制大学の状況を示している。

⁵¹ 文部省『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』。1950年7月～12月の刊行物を対象とした『文部省刊行物目録』第3集に記載されている。なお、同目録では、大学学術局大学課編とされている（文部省初等中等教育局教科書管理課・前掲『文部省刊行物目録総覧』、7頁）。吉岡力『大学入試 世界史の傾向と対策 昭和27年度版』（旺文社、1951年9月）は、この手引からの引用をする際に、「昭和25年12月」（1950年12月）と付しているので、1950年12月頃発行されたものと判断した。

⁵² 文部省・前掲『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』、「まえがき」、1頁。

⁵³ 同上、1～2頁。

「研究」を求めている。また、当初は理想として提示した教科の「共通な問題」に対する慎重な取り扱いを求めている。いずれも 1949 年度と 1950 年度の実際の入試問題での不適切な事例への対処であった。この「一般的注意事項」をもとにして、各教科の方針が検討されている。

社会科の入試問題については、「一般方針」として 6 点が掲げられている。それは、①「科目の教育目標」に沿って偏りなく出題すべきこと、②「その分野の専門家でなければ知らないような細かい知識を必要とする問題は絶対に避けなければならない」こと、③「論文体テストは客観的判定が困難であるから、出題にあたっては慎重を期せられたい」こと、④選択科目の難易を一樣にすること、⑤「選択法の形式」の出題では「思いつきの解答」ができない工夫をし、「合理的な採点法」をとること、⑥「各科目にわたる共通問題」は、特定の科目を学習した生徒に有利・不利になりがちなため、「理想に近い問題が作製された場合」のみとすることが望ましいこと、というものであった。これらの「一般方針」も 1949 年度と 1950 年度 of 社会科入試問題の実情が反映している。

この 1951 年度入試向けの『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』では、「日本史、世界史」として歴史の「学力テスト」作成の留意点を提示している。前述した 1950 年度入試向けの『昭和二十五年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説』で提示した留意点とほぼ同様の指示を繰り返している中で、以下の下線の部分が追加されている（下線は引用者による）。

1. 中学校・高等学校の歴史は従来の歴史科でなく、（歴史学そのものではない）、社会科という一教科中の科目であること、即ち社会科歴史であり、社会科以外のものではありえないこと。
2. 従って社会科及び社会科歴史の学習目標及び方法を十分検討され、その目標についてテストされたく、教材そのもののテストに陥らぬよう留意せられたきこと。
3. 単に史実記憶の量をテストするが如き問題をさけ、歴史事実でなく、歴史的思考力のテストに重点をおかれたいこと。
4. 生徒の使用する教科書（参考書）は、従来の如く教師がこれを頁を追って一々講義するものではなく、その内容は決してそのまま生徒の学習内容ではないこと、教科書は生徒の問題解決のため各自必要に応じてその都度解決の手がかりを求めて使用するだけのものであつて、教科書全部を教師が講義するものではなく、生徒は教科書全部を暗記するものでもないことを銘記されたいこと。
5. 歴史は現在のわれわれの生活の理解のためのものであり、社会科の目標が現在社会生活の理解である点から、特に近代史に重点をおかれたいこと。
6. 客観テストの形式だけを採らずに、その根本趣旨を十分に汲まれて、新教育の理想・目的・方法に合致し背反せぬよう、慎重に問題を作成されたいこと。
7. 個々の小さな事件・事物・人名・年月ではなく、大きな歴史の時代の流れとその

意義を把握理解しているか否かをテストされたいこと。

8. テストの出題は次の三項目の全般に亘るよう実施されたいこと。

(1) 重要な概念及び原則の理解

(2) データを正しく処理し解決する能力

(3) 基本的知識および原則を現在社会の問題に応用する能力

9. その他は出題の一般方針によること。

10. 東洋史・西洋史のテストは現行の教科目外のものであり、夜間高等学校卒業生等のための本年限りの全く臨時的処置であり、出題方針も全く世界史に準じられたいこと⁵⁴。

前年度に提示した留意点が、出題の形式のみが独り歩きをして、社会科歴史の趣旨が実際の入試問題にほとんど反映されていなかったことへの苛立ちが、特に追加された部分にあらわれている。「世界史」の入試問題には、社会科歴史への配慮が全く見られず、発行されているすべての教科書（準教科書）を一字一句暗記していることを前提としたような出題が少なくなかった。上記の「8」は「次の三項目について実施せられたきこと」とされていたのを、「次の三項目の全般に亘るよう実施されたいこと」（下線は引用者）と修正されている。特に「(3) 基本的知識および原則を現在社会の問題に応用する能力」に関する出題が少なかったことへの対応であると考えられる。入試問題の大半が「(1) 重要な概念及び原則の理解」に関わる知識の有無を安易に問うていた（この点は後述する）。関連して、上記の「6」と「7」が追加されている。なかでも「6」は文面だけを見ると文部省が推進していた「客観テスト」の否定とも読める。歴史の入試問題における「客観テスト」の弊害の大きさを物語っている。

さらに、「学力テスト出題の参考」として「世界史学習上の主要概念（試案）」が掲げられた。以下のようなものであった（下線は引用者による）。

世界史学習上の主要概念（試案）

原始人類、原始社会の生活、文明の発生、国家の成立、古代ギリシアの民主政治と古典文明、キリスト教の発生とその発展、ローマ帝国の歴史的意義、インドの古代社会と宗教、中国の古代社会とその文化、大化の改新、日本の古代国家の成立発展、遊牧民族の歴史的発展、イスラム国家と文化の特色、ヨーロッパの封建社会、市民階級の擡頭と中央集権的国民国家の成立、ルネサンスと宗教改革、地理上の発見と東西交渉、東アジアの専制国家とその特質、日本の封建社会、ヨーロッパの絶対君主制、資本主義と近代科学、市民革命、デモクラシー、西洋諸国のアジア進出、日本の近代化と明治維新、ナショナリズム、社会主義、帝国主義、第一次世界大戦、ロシア革命、中国の近代化、インドの近代化、第一次世界大戦後の世界情勢、近代

⁵⁴ 同上、39～40 頁。

科学の発達、世界恐慌と全体主義、第二次世界大戦、戦後の世界情勢と世界平和運動、アジア諸国の民族運動と独立の達成、現代日本の世界史的地位⁵⁵

この1951年度入試に向けた40項目の「世界史学習上の主要概念（試案）」は、前述の1950年度入試に向けた「世界史学習上の重要概念（試案）」（1950年1月頃発行）と、その一部の表記を改めた「参考 世界史学習上における重要事項」（1950年9月通達）に続くものであった。上記の引用中の下線部分は、それ以前の「重要概念」・「重要事項」では挙げられていなかった、もしくは包括的にしか示されていなかった概念・事項の追加である。ほとんどが日本を含めたアジア各国の歴史の内容がこれに当たる。日本を含めた東洋史の内容を全時代において配置した形式の「世界史」が、新たに「学力テスト出題の参考」として提示された。この修正の背景には、「世界史」入試問題が西洋史を中心とした問題が多かったことがあると考えられるが、詳しい経緯は確認できていない⁵⁶。

注目すべきは、この40項目の「世界史学習上の主要概念（試案）」が授業のための参考ではなく、「学力テスト出題の参考」として提示されている点である。これは前述した1950年度入試のときと同様の対応であった。高校教育の観点からは実に本末転倒な「世界史」の提示が継続されている。1951年度中に翌年度の「世界史」入試問題の傾向と対策を高校生向けに解説した吉岡力は、「世界史学習上の主要概念（試案）」を引用するに際して、「多くの世界史検定教科書の綱目の基準となっており、世界史試験問題と対照してみると、その出題の多くはこれらの項目より選んで作成されているから、十分に注意する必要がある⁵⁷」と述べている。当時における「世界史学習上の主要概念（試案）」の受けとめられ方と位置づけの重さがうかがえる。そのようなものが授業担当者向けではなく、入試問題作成担当者向けの「参考」としての提示が繰り返された。

さらに1951年度入試用の『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』では、模範的な問題を作成して例示していた従来の方法をやめて、1950年度入試で実際に出題された問題を通じて「大体適当な出題かと思われるものの中からごく一例をあげ⁵⁸」る方法に改めた。具体的に「世界史（東洋史・西洋史の出題をも含めて）」では、5問を「(A)重要概念の理解」「(B)データー処理解決の能力」「(C)基本的知識および原則の応

⁵⁵ 文部省・前掲『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』、41頁。なお、「日本史」については58項目から成る「日本史学習上の重要概念（試案）」が掲げられている（同書、40頁）。

⁵⁶ 吉岡力・前掲『大学入試 世界史の傾向と対策 昭和27年度版』では、1950年度入試と1951年度入試の「世界史」について、「問題を主題によって大きく分類してみると、東西の交渉及び比較の問題と共に、西洋史を主とする問が多数を占め、純然たる東洋史の問題は極めて少数であった」（27頁）と述べている。

⁵⁷ 同上、14頁。引用文中に「世界史検定教科書」とあるが、執筆された1951年度当時は正式な意味での検定教科書ではなかった。

⁵⁸ 文部省・前掲『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』、41頁。

用」に分けて、それぞれに留意点を述べる形で、以下のように提示された。

表 5: 文部省から示された「世界史」の「適当な出題」の「一例」(1951 年度入試用)

問題文、出題大学等	問題の内容、文部省による留意点の記載
(A) 重要概念の理解	
①次の文章を読み——線を施した部分について後に記す問に答えよ。 【岡山大学・世界史・第1問】	・近代以前の東洋と西洋の科学に関する文章。 「その実例を二つあげよ」などの(1)～(4)の4問。 <u>(単なる東洋・西洋ではなく、世界全般にわたる意義の出題は次の問題と共に適当であろう。)</u>
②下に記した項目のうちから、次の文章の空白を埋めるのに適したものを選び、その番号を解答欄に記入せよ。 【東京大学・世界史・第1問】	・東アジアと西アジアにおける文化に関する文章。a～tの20か所の空欄に、1～30の30個の語句。 <u>(単語が難しい専門語にわたらぬように留意されたい。)</u>
(B) データー処理解決の能力	
③次の各問題について、正しいと思うものに○、誤りのあるものには誤りのある場所を指摘し、正誤を施すこと。 【東京大学・東洋史・第1問】	・「(1) 中国で初めて文字ができたのは周代である。」などの(1)～(10)の10の短文。 <u>(単なる正誤だけではなく、その理由をあげさせることは必要であろう。形式も簡単な一段階ではなく、複雑な数段階にわたるものがより好適であろう。)</u>
④次の語の中から適当なものを選んで□の中に入れよ。 【金沢大学・世界史・第4問】	・ヨーロッパでの議会と王権の対立に関わる文章。10の空欄に、14の語句。 <u>(この種の問題では単語が難しい細かい専門述語にわたらぬよう留意されたい。)</u>
(C) 基本的知識および原則の応用	
⑤列強は、どのような理由と目的のために、近代アジア諸国の内政問題に干渉してきたのであろうか。左のうち、とくに重要と思われるもの5項を番号を○でかこめ。 【早稲田大学教育学部・東洋史(世界史と共通)・第1問】	・「(1) 領土の支配によつて商品市場を獲得する。」などの(1)～(10)の短文。 <u>(今日の現代社会の現実の問題に歴史的知識原則を応用する能力を検査するような問題の方が適当と思われる。)</u>

注1: 出典は、文部省『新制大学短期大学学力検査問題作成の手引』、1950年12月頃、43～47頁)である。原文に「出題大学等」は記載されていないが、『全国新制大学 入試全科正解 昭和25年度』(『蛭雪時代臨時増刊号』、旺文社、1950年5月)により記入した。

注2: 問題文に付した①～⑤の番号および「文部省による留意点」の下線は引用者によるものである。

る。

上記の5問は、選択問題を基本としている。前述の「学力テスト」作成の留意点にあった「6. 客観テストの形式だけを採らずに、その根本趣旨を十分に汲まれて、新教育の理想・目的・方法に合致し背反せぬよう、慎重に問題を作成されたいこと」を見ると、「客観テストの形式」にこだわらない問題作成を促しているように読める。しかし、上記の問題では、いわゆる「論文テスト」は取り上げられていない。上記①の「二つあげよ」「一つあげよ」「いつ頃どこで起ったか」などの語句を書かせる問題、さらに、上記③の正誤を問いながら「誤りのあるものには誤りのある場所を指摘し、正誤を施す」問題が、留意点での指示にあたるものと考えられる。特に上記③は、実際の問題が「○」と「×」をつけるだけのものであったのを、短文を3つ差し替えた上で、「誤りのある場所を指摘」する形式に修正して掲載したものであった⁵⁹。1951年度に向けても文部省が「大体適当な出題」と判断した「世界史」入試問題が選択問題または語句を解答する問題であったことは、入試問題作成のみならず、授業に対しても少なからぬ影響を与えたものと考えられる。一方で、内容的には、東洋史と西洋史を単純に組み合わせた問題ではないこと、専門的で難しい語句を避けるべきこと、今日の「現実の問題」に応用する能力を検査すべきことを示している。これは従来の指摘を具体的な問題を例に、繰り返したものになっている。これまで出題の割合が少なかったため、促進すべき「(C) 基本的知識および原則の応用」の例を事実上の「○×問題」でしか提示できなかった点を考えると、文部省が意図した入試問題の改善にどれほど結びついたのかは疑問である。

3-2. 1951年度「世界史」入試問題の出題の動向

1951年度入試において「世界史」による学力テストは2年目となった。「世界史」入試問題が、文部省の指示によりどのように変化したのかを、当時において高校生に「世界史」入試の「傾向と対策」を解説した吉岡力の分析を通して見ていきたい。あえて当時の吉岡の分析に注目するのは、「世界史」とはどのような問題でテストされる存在であるのかを、「傾向と対策」として高校生や「世界史」教師に対して示したものであったためである⁶⁰。

前述したように、文部省は「重要な概念および原則の理解」「データを正しく処理し解決する能力」「基本的知識および原則を現在社会の問題に応用する能力」という3項目について「全般に亘る」出題を主張していた。吉岡の分析では、文部省が示した

⁵⁹ 元の問題は、『全国新制大学 入試全科正解 昭和25年度』（〔蛭雪時代臨時増刊号〕、旺文社、1950年5月、社会56頁）を参照した。

⁶⁰ 吉岡力（1908～1975年）は、東京大学教養学部在職する西洋史研究者であった。1949年に発行した参考書である『世界史の研究』（旺文社）の著者としても知られた。また、初の「世界史」検定教科書の一つとなる『高等世界史』（大類伸監修、好学社）を1951年以降発行していた。

3 つの「テストすべき能力の種類」で分類した入試問題の比率は次のような結果となっている。

表 6：吉岡力が分析した 1949～1951 年度大学入試での「世界史」（「東洋史」「西洋史」）問題における「テストすべき能力の種類」別の問題数と比率

テストすべき能力の種類	1949 年度入試		1950 年度入試		1951 年度入試	
	問題数	比率	問題数	比率	問題数	比率
重要な概念および原則の理解	110	34%	119	58%	132	64%
データを正しく処理し解釈する能力	169	53%	53	26%	49	24%
基本的な知識や原則を応用する能力	41	13%	32	16%	25	12%

注：吉岡力『大学入試 世界史の傾向と対策 昭和 27 年度版』（旺文社、1951 年 9 月、22 頁）の「表 4」「表 5」「表 6」により作成。1949 年度入試は東洋史と西洋史の問題の合計である。

「重要な概念および原則の理解」が急激に割合を増しているのに対して、「データを正しく処理し解決する能力」は半減しており、「基本的な知識や原則を応用する能力」の比率が格段に低いままで推移していることを示している。これは文部省の指示が実現していない現実を示している。「重要な概念および原則の理解」として出題されている用語等の暗記が「世界史」入試問題の対策で有効であり、不可欠であることを数値で示したものである。

一方で、出題の形式についての吉岡の分析では、「世界史」入試問題の形式の比率は次のような結果となっている。

表 7：吉岡力が分析した 1950～1951 年度大学入試における「世界史」問題の形式別の問題数と比率

		1950 年度入試			1951 年度入試		
基本形式	細目分類	出題数	百分比	集計	出題数	百分比	集計
完成問題	挿入語句を示さぬもの	30	15%	73 (36%)	35	17%	70 (34%)
	指定の語句より選択	43	21%		35	17%	
正誤問題	解説不要	20	10%	24 (12%)	14	7%	29 (14%)
	訂正又は解説付	4	2%		15	7%	
選択問題	解説不要	24	12%	27 (13%)	26	12.5%	31 (15%)
	解説付	3	1.5%		5	2.5%	
組合せ問題	単独	23	11%	32 (16%)	29	14%	31 (15%)
	選択と混合	9	4%		2	1%	
解説問題	論文形式を含む	34	17%	34 (17%)	32	15.5%	32 (15.5%)

その他	排列	9	4%	14	10	5%	13
	図解その他	5	2%	(6%)	3	1.5%	(6.5%)
合計		204	100%		206	100%	

注：吉岡力『大学入試 世界史の傾向と対策 昭和27年度版』（旺文社、1951年9月、21頁）の「表1」「表2」により作成。表中の用語、数値は原文のままである。

出題の形式において、いわゆる穴埋めである「完成問題」、「○」「×」を基本とする「正誤問題」、選ばせる「選択問題」・「組合せ問題」などの「客観的なテスト」が大半を占める状況が、2回の「世界史」入試において全く変化がなかったことを示している。すなわち、覚えた知識を穴埋めや選択などの形式で問われる「世界史」が継続していた。

吉岡の分析結果は、新制大学入試問題が高校教育にもたらした影響について、高校教師の中村一朗が書いた「高校生徒が歴史を暗記物と考えることは戦前以上になっている⁶¹⁾」という嘆きに端的に表されている。

3－3. 1952年度大学入試に向けての文部省の施策とその転換

1952年度入試に向けて、文部省は高校の学習指導要領の中間発表をまとめた冊子である『高等学校諸教科改訂学習指導要領の中間発表⁶²⁾』を、1951年9月に各大学に送付した。

ここで「世界史」については、基本として1年前の1950年9月の通達である「高等学校社会科世界史の学習について」を収録している。ただし、同通達にはなかった6項目の「特殊目標」をはじめに掲げている。これは、後の1951年12月発行の『中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ⁶³⁾』に掲載されるものと同文である。入試問題作成の参考とするために、前倒しで掲載した形になっている。「世界史」学習のあり方を述べた同通達の前文に当たる部分を要約して、「特殊目標」の「注」という形で記載している。この「注」は、前述の『中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ』にはないものである。そして、「学習単元（試案）」を「世界史参考単元」と名称を改めて5頁にわたって載せている。大学に対して、高校での「世界史」の学習がいかに従来とは異なるべきものであるかを、「特殊目標」や「注」で解説を加えながら通知することで、社会科としての「世界史」入試問題の実現を要求したものであった。他方で注目されるのは、同通達の最後にあった37項目の「参考 世界史学習上における重要事

⁶¹⁾ 中村一朗「社会科としての歴史教育―教師の立場から―」『世界歴史事典月報』第2号、平凡社、1951年8月、6頁。ただし、「日本史」も含めた記述であると考えられる。

⁶²⁾ 文部省『高等学校諸教科改訂学習指導要領の中間発表 昭和26年9月』、1951年9月。本冊子のはじめに、「各大学長」あてに「文部省大学学術局長」と「文部省初等中等教育局長」の連名で1952年度入試の問題作成での利用を依頼している。

⁶³⁾ 文部省『中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ 中等社会科とその指導法（試案）昭和26年（1951）改訂版』明治図書出版、1951年12月。

項」をそのまま掲載していることである。前述した、1951 年度入試向けに改訂したはずの「世界史学習上の主要概念（試案）」ではない。旧に復した形になる非常に杜撰な対応となっている。

このように、文部省は高校あての「世界史」学習指導要領の中間発表（1950 年 9 月）を、翌年に大学に向けて提示した。そして「世界史」学習指導要領は 1952 年 3 月に発行された。文部省は入試問題を作成する大学に学習指導要領に則った社会科としての「世界史」を学力テストで問うことを期待し、要求した。しかし、その実現は大変に難しいことであった。そのため、かえって、同時に求めた「客観的なテスト」の方法は形式面のみが独り歩きし、暗記した知識の多寡を測るような安易な出題を促す結果をもたらした。このことは、「世界史」入試問題作成者の多くが、大学での教育とは関係のない社会科教育を真剣に受けとめなかったこと、もしくは受けとめることができなかったことを示している。

その後、文部省は方針の転換を図る。1953 年度入試に向けて、社会科の入試全体として、採点者の主観による不公平に注意を促しつつ、「問題のすべてが客観テスト形式によらなければならないことはない。必要に応じて論文体テストを併用することもよい⁶⁴」と明確に述べるに至った。「世界史」については、1952 年度入試で「史実の記憶に重点をおく出題が相変らず多くみられる」ことを指摘し、「今日の高等学校教育の態制をくずさぬよう、じゅうぶん考慮してもらいたい」と大学に要請している⁶⁵。さらに 1955 年度入試に向けては、「論文式の問題」の長所と短所をあげて、出題方法や採点手順での客観性を増す工夫を求めている⁶⁶。文部省は「客観テスト」と「論文体テスト」を併用した社会科としての「世界史」に相応しい入試問題を求めるようになったが、実際のところ、過重な記憶を強いる出題は跡を絶たなかった。

3-4. 「世界史」大学入試問題に対する「世界史」教師からの批判

前述のように、高校側からの「世界史」入試問題への懸念は、「世界史」による入試の実施前から出されていた。「世界史」が 1950 年度入試で実施されてから以後、この懸念は現実のものとなり、高校で「世界史」を担当する教師から「受験勉強と歴史教育のギャップ⁶⁷」を問題視する声が多くあげられることになった。一方で、出題者である大学の研究者からは「大学としては一定の水準が必要」であり「要求しているレ

⁶⁴ 文部省『大学短期大学等学力検査問題作成の参考資料』、59 頁。これは 1953 年度入試に向けたもので、1952 年 7 月～12 月を対象とした『文部省刊行物目録』第 7 集に掲載されている（文部省初等中等教育局教科書管理課・前掲『文部省刊行物目録総覧』、12 頁）。この目録では、大学学術局大学課編、MEJ 番号 2316 と記載されている。

⁶⁵ 同上、81 頁。

⁶⁶ 文部省『大学短期大学等学力検査問題の参考資料 社会科編』、41 頁。これは 1955 年度入試に向けたものである。

⁶⁷ 「座談会 受験と世界史教育—受験勉強と歴史教育のギャップをどうするか—」『歴史評論』第 34 号、民主主義科学者協会、1952 年 2 月。

ベルもそれほど高すぎるとは思いません」と、大学での教育の立場が繰り返され⁶⁸、また、「現在の社会科の世界史教育が、その意図はともかく、その効果が十分にあがっていないのではないか⁶⁹」と、高校での教育の不十分さが逆に批判されることもあった。滋賀県立大津東高校の小島市太郎は、5回の「世界史」入試を経た1954年に次のように述べている。

ある社会科の研究会で、世界史の出題範囲を某大学教授にお尋ねしたところ、現在までに刊行されているすべての高校世界史教科書のいずれかに載っておればそれは出題範囲となるとの御意見を聞き、呆然としたことがある。…中学で世界史についてごく断片的な知識しか与えられていない生徒に、古今東西の複雑な時代観念を理解させ、更にすべての教科書に叙述された具体的事実を、もれなく教えることは極めて困難な仕事である。ともすれば教師は本末を忘れて重箱の隅を探ることに汲々とし、全く無味乾燥な上すべりの授業に終始し、生徒は無暗矢鱈に丸暗記しようとする傾向が生まれる。これはかえって世界史発展の理解をさまたげるものである⁷⁰。

入試問題という「世界史」の学習のあり方を規定する新たな基準が、高校の教育に大きな影響を及ぼしている様子が表現されている。「世界史」は出発時から大学入試に組み込まれ、「世界史」の学習とは何かという教育的な検討や歴史学的な検討とは全く別に、このように試験をされる存在として展開した側面を持った。教育の理想と受験の現実のはざまに立たされた「世界史」教師の苦悩は、「世界史」実施直後から始まっていた。

おわりに

以上、「世界史」入試開始前後の数年間を取り上げて、「世界史」入試問題の成立と展開を見てきた。「世界史」入試問題は、新制大学1年目の1949年度入試での「東洋史」「西洋史」での出題を経て、2年目の1950年度入試で初登場した時点で、すでに出題の形式が定まっていた。その後の展開において文部省は大学に改善を求めたが、大きく変わることはなかった。

今日言われている「世界史」の入試問題の解決すべき諸点は、その出発の時点において作り上げられていたものであった。しかも、「世界史」入試問題に対しては、出題

⁶⁸ 同上、38頁。発言は東京大学の吉岡力によるものである。確かに当時の東京大学の「世界史」入試問題は、本文中でも紹介したように比較的基本的な内容の問題ではあった。

⁶⁹ 酒井忠夫「大学入試問題と世界史教育」『歴史教育』第3巻第6号、歴史教育研究会、1955年6月、84頁。酒井は東京教育大学助教授である。

⁷⁰ 小島市太郎「大学入試と世界史」『世界史の研究』第1輯、山川出版社、1954年11月、27頁。

が始まる前の1949年のうちから高校の「世界史」教師たちにより懸念が指摘されていた。新科目「世界史」は何もないところから始まり、高校において授業を実施しながら検討が進められたものであった。一種の混乱の中で、社会科としての「世界史」の授業をどのように作り上げていくべきかが、高校において「世界史」を受けとめた教師たちにより授業実践の中で検討が進められていた。その一方で、大学の歴史研究者そして大学という単位でも「世界史」教科書（準教科書）の作成が最も盛んになった時期でもあった⁷¹。すなわち、大学の歴史研究者たちも高校での「世界史」をどのように記述するかを検討に取り組んでいた。しかし、本稿で見てきたように、大学においては、「世界史」入試問題に対して、高校での社会科としての「世界史」学習の観点から検討した形跡がほとんど見られない。「世界史」入試問題は、新しい科目である「世界史」はこのように試験される存在であるという現実を、学習指導要領も正式な検定教科書もない中で、高校に突き付けた形になった。その発端は、他ならぬ文部省の指示であった。結果的には、教育行政を担う文部省が社会科としての「世界史」授業の理念を説きつつ、その理念と矛盾した安易な「世界史」入試問題の出題を助長してきた。

根本的には、この教育行政としての場当たりの施策とともに、本文で引用した「世界史」教師・橘高信の発言にあったように、「大学の先生方が、高等学校に課されている社会科歴史の意味のあるところを御存知無い。否、無関心でいられる」という大学側の社会科教育への「無関心」に原因が求められよう。今後の歴史教育を考える際には、本稿で取り上げた「世界史」入試問題の成立と展開に関わる歴史的経緯を踏まえた検討が不可欠であると考ええる。

（資料の収集において、国立教育政策研究所教育情報研究センター教育図書館、法政大学第二中・高等学校育友会教育研究所そして各大学附属図書館に多大なるご協力を頂いた。記して感謝を申し上げる。）

⁷¹ 1949～1950年度の時期の「世界史」準教科書の作成主体を見ると、個人や共同の歴史研究者に加えて、大学（等）を単位とした学会・研究会も大きな役割を果たしていた（拙稿・前掲「準教科書に見る初期の世界史教育の模索」、61頁）。